

氏 名 ・ （ 本 籍 地 ）	前 島 信 也（三重県）
学 位 の 種 類	博士（仏教学）
学 位 記 の 番 号	甲第 117 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 31 年 3 月 15 日
学 位 論 文 題 目	敬西房信瑞の研究
論 文 審 査 委 員	主査 林 田 康 順 副査 曾 根 宣 雄 副査 石 川 琢 道 副査 落 合 俊 典

前島 信也氏 学位請求論文審査報告書

「敬西房信瑞の研究」

論文の内容の要旨（1200字以上）

本論は、「敬西房信瑞の研究」と題した、浄土宗祖法然上人（以下、祖師の尊称を略す）の門下、隆寛・信空の弟子である敬西房信瑞をめぐる総合的研究である。特に、従来等閑視されてきた『浄土三部経音義集』と『広疑瑞決集』を取り上げ、その書誌学的・思想的研究を通じて、信瑞の人物像に迫っている。序論（①研究の目的、②研究の回顧、③研究のねらいと本論の概要）に続いて、本論は次の四篇から構成される。

第一篇「信瑞の伝承」では、第一章「信瑞に関する伝承」、第二章「著作に関する伝承」の2章に分ち、信瑞とその著作に関する伝承に迫っている。『広疑瑞決集』『明義進行集』が大正期に発見されるまでの信瑞はほとんど無名の人物であったとし、①信瑞の伝承を受持する人物が消滅したため、系譜資料編纂時には信瑞の伝承は絶えていたこと、②信瑞の特徴的な典籍は、他派、存覚の著作や金剛寺聖教のなかに細々と伝承されたに過ぎず、『和語灯録』と『四十八巻伝』の作成によって信瑞の著作も歴史に埋没していったことを指摘している。

第二篇「信瑞著作の書誌学的整理」では、第一章『浄土三部経音義集』、第二章『広疑瑞決集』の2章に分ち、信瑞著作の書誌学的整理を行っている。第一章では、『浄土三部経音義集』の現存15本をすべて調査した上で、そのすべてが江戸期の写本であり、江戸期に積極的に修学されたと指摘している。また、全体を「義山本系統」「貞諾本系統」といった系統に2分類できるとし、「義山本系統」が原書に近いと結論づけている。第二章では、『広疑瑞決集』の現存諸本を調査し、その関係性について論じている。その結果、「正大青焼本」を「円輪寺本」書写本の謄写本であると指摘し、「知恩寺本」を国語学的見地から1300年までに書写されたと指摘した上で、「知恩寺本」と「正大青焼本」とを比較し、「正大青焼本」に高い信頼がおけることを主張している。

第三篇「信瑞著作にみる教学背景」では、第一章『浄土三部経音義集』—信瑞の宋代仏教文化の受容—、第二章『広疑瑞決集』—説話文学の受容—の2章に分ち、信瑞の教学背景を明らかにするため、『浄土三部経音義集』と『広疑瑞決集』の序跋文と引用典籍の検討を行っている。第一章では、『浄土三部経音義集』の序跋文が高い作文技術によっている点、本文に思溪版大蔵経や宋代文献を多く引用している点を明らかにした上で、信瑞の著作である『泉涌寺不可棄法師伝』との関係を検討し、泉涌寺との関係が深いこと、高い作文技術が評価されたことなどが伝記編纂要請の契機となったことを指摘している。第二章では、『広疑瑞決集』の引用文献、特に説話の引用について検討し、①『日本霊異記』『日本極楽往生記』といった出典を明記するもの、②『古事談』『続古事談』『古今著聞集』といった出典を明記しないものが混在するとし、それらを現存典籍と比較し、その引用態度について考察している。その結果、信瑞が仏典・中国典籍・日本説話

を引用することによって三国間共通の因果関係を導いていると指摘している。また信瑞の引用する『古事談』『続古事談』は、現存する『古事談』『続古事談』の諸本よりも古い形態を有すると指摘し、『広疑瑞決集』の高い価値を明らかにしている。

第四篇「信瑞の思想—『広疑瑞決集』の思想とその特徴—」では、第一章「諏訪信仰をめぐって」、第二章「浄土思想」の2章に分ち、『広疑瑞決集』に説示される諏訪信仰と浄土思想の検討を施している。第一章では、『広疑瑞決集』撰述当時の諏訪信仰を検討し、『広疑瑞決集』の説示が当時の諏訪信仰を知る重要な典籍であることを明らかにしている。その上で諏訪信仰は、殺生祭神を対象とし、殺生による供養をもって護国安寧のために祭祀される信仰であると指摘している。また本地垂迹説については、『広疑瑞決集』での神明の定義を再検討し、①仏菩薩の本地を有する神明、②仏法の守護者たる神明、③衆生と同様に仏法による救済を求める神明の3種に分類していたことを指摘した上で、すべての神が念仏を愛樂していると解釈していたと結論づけている。次に殺生論については、信瑞が殺生を許容しないことを明らかにした上で、殺生祭神を虚構的殺生として捉え直していると結論づけている。さらに治世論では、神慮に叶う道理として提示された無邪憐愍が、儒教と仏教の一体化、さらには、仏教・儒教・神道の同一化、ひいては、インド・中国・日本をめぐる説示の同一化として提示されていると指摘している。第二章では、三願思想・実践行・往生の定不定を論じている。まず三願思想については、隆寛の三願思想を引用しつつも、法然や明遍の思想を提示していることから、意図的な思想の取捨があることを指摘し、「相伝の一義」という言葉を用いて一定の幅を設けていると指摘している。また実践行については、法然の提示する三心具足の称名念仏の相続を継承していると分析し、その三心は信空の三心釈に基づいており、聖光・明遍の解釈とも軌を一にしていると指摘している。さらに往生の定不定については、往生と殺生の併修では往生不定であり、称名念仏の相続によって往生が定まると主張していることを明らかにしている。

総結では、以上の考察を踏まえた上で信瑞の人物像に以下のように迫っている。『浄土三部経音義集』に引用される膨大な外典、中国からもたらされた最先端の宋代典籍を積極的に取り込んでいることなどから、信瑞が稀有なる学僧であったと指摘している。そして、『浄土三部経音義集』が高く評価され、その卓越した文章力を買われて『泉涌寺不可棄法師伝』の著作を依頼されたと想定している。その一方、『広疑瑞決集』編纂における殺生への対応、多くの説話文学を用いて勧進する姿からは、勧進僧という姿を彷彿とさせると指摘している。そうした勧進僧・念仏行者といった遁世を願う信瑞の姿勢は、教団から一線を引くものとなり、後の浄土宗教団からは埋没をしていったと結論づけている。

審査結果の要旨（1200字以上）

本論文について、以下、論文の目次に沿って、簡潔に審査結果の要旨を述べる。

序論、特に②研究の回顧においてでは、1 信瑞、2 『浄土三部経音義集』、3 『泉涌寺不可棄法師伝』、4 『広疑瑞決集』、5 『明義進行集』、6 『黒谷上人伝』の6項目に分ち、先学の研究を網羅して適切な整理を施しており、それによって本論の撰述意図をスムーズに導き出すことに成功している。

第一篇では、断片的な信瑞あるいはその著作に関する詳細な伝承を抽出し、いかにして信瑞とその著作が歴史に埋もれていったのかという歴史的経緯を浮き彫りにすることに成功している。

第二篇では、『浄土三部経音義集』と『広疑瑞決集』との書誌学的検討がなされるが、本論全体の中、まさに圧巻と断言してもいい重厚にして詳細な作業となっている。『浄土三部経音義集』の考察では、国内に留まらず、中国や台湾にも調査に赴き、現存する諸本を網羅して、書誌学的整理の対象としている。その書誌情報、さらには、諸本の対校作業は緻密であり、提出された附録も含め、今後、他の追従を許さないほどの作業と言えよう。また、『広疑瑞決集』の考察についても、全国に足を伸ばして諸本の調査を実施しているが、その中、「正大青焼本」を取り上げてサイアノタイプという複写を用いていることを明らかにした考察や「知恩寺本」の送り仮名をめぐる詳細な考察は見事であり、本論文の土台固めに大いに力を発揮している。

第三篇では、通常の引用典籍を通じた考察に加え、信瑞の序跋文にある駢儷体に注目することによって、信瑞の文章力の高さを明示し得たことは、筆者ならではの手続きであり、その主張を骨太のものとするのに大きな力を発揮している。また、『広疑瑞決集』の引用典籍である『古事談』『続古事談』の詳細な検討により、現存する『古事談』『続古事談』諸本よりも『広疑瑞決集』所収の『古事談』『続古事談』の方が古い形を留めているとする主張は、今後、国文学・歴史学の研究からも大いに注目される考察であると推測される。

第四篇では、これまで「無観称名」のひとりで片付けられてきた信瑞の浄土教思想について、現存するテキストを通じて、その解明に意欲的に取り組もうとする姿勢は高く評価できる。諏訪信仰をめくり成立した『広疑瑞決集』という特殊なテキストを通じて、信瑞の浄土思想を明らかにする作業は困難な道のりであったと察するが、その結論は妥当であり、論理的な考察であった。

平成31年2月8日午前10時から約90分間にわたり、以上の提出論文について口述試問が厳正に実施された。口述内容は多岐かつ詳細に及んだが、その主要な点を指摘しておきたい。

まず、信瑞を評した「田舎の学者」（資料篇3-1-B『浄土三部経音義集』序跋 書き下し・現代語訳）序文(5)、※ページ表記がないが145頁目）という表現について、泉涌寺における信瑞の驚異的な活動実績からすれば、その表現は適切とは言えないのではないかという指摘に対し、三国辺地論に基づいた考察結果として用いたが再検討したいとの応答があった。

次に、信瑞の浄土思想をめくり、最終的には法然の思想に準じているという自身の指摘と異なるようなテキスト理解があるのではないか（205頁⑧の解釈）という指摘に対し、論文に引用した箇所の前段を含めれば論文の読みで問題ないと受けとめているが再考察したいとの応答があった。

また、信瑞は「いわゆる「教団」形成とは一線を画している」（230頁）という表現をめくり、「教団」の定義がなされていないことから、顕密の教団も含めて理解が不安定になるのではないかという指摘に対し、法然を祖とする門弟達の分派教団を意図して執筆を進めたが、あらためて表現を整えたいとの応答があった。

口述試問終了後、主査・副査の合議の場を設け、「これまで誰も取り組まなかった信瑞の全体的・総合的な論考に成功しており大いに評価される」、「全体、特に書誌学的整理は詳細にわたり高く評価される」、「大部に及ぶ論考は精力的・意欲的な姿勢の表れであり、今後の学問的進展も大いに期待される」といった高い評価を受けた。その結果、本提出論文を課程博士論文として認定することを主査・副査全会一致で承認した。

以上、前島信也氏「敬西房信瑞の研究」を課程博士論文として認定し、審査報告とする。

公表予定

日 程	平成 年 月 日 (未定)
公表形態	①掲載誌名：【 】【 】号・巻 【 】頁 【全文・要約】
	②単著（発行者）
題 目	<※タイトルを変更した場合>